

編集後記

■ 2001年度に設立された語学教育研究所は、2015年度を以って休止するという残念なお知らせをしなければならぬ。教育理念のひとつとしての「国際化」からの後退ではなく、「英語教育」＝「国際化」の等式では対応しにくい現在のグローバリゼーションの多様性に対応するための発展的な考えのものと判断と思いたい。

■ 言語の視点から考えると、20世紀の「国際化」は英語を媒介とし英米の思考、文化、社会システムの理解が中心となり、それを「世界標準」とする準備期間であったと思う。21世紀に入ると、言語面については、英語が国際言語として定着が果たされたといっていよいであろう。ICTの急速な発展もあり、世界の各国・各地域の情報が入手し易くなった。また、人の移動も活発になり、わざわざ外国語を学習しなくても、また現地に赴く必要もなく、日本にいながらにして多様な異文化に触れる機会が多くなった。

■ 異文化に触れることで、海外に出て活躍したい、実体験をしたいという若者も増加している。それは、本号に掲載したグローバルセミナーの学生アンケートの結果からも明らかである。その手助けをしていたのは英語教育であろう。

■ 資格取得支援制度のおかげもあり、本学のTOEIC受験者の推移に大きな変化があった。2012年度から2015年度までの結果を簡単に記す。まず、受験者数は、2012年度53名、13年度37名、14年度51名、15年度79名と増加傾向にある。スコアを見てみる。

2012年度最高得点655点（600点台1名、500点台3名、400点台7名、300点台15名）

13年度最高得点745点（700点台2名、500点台1名、400点台5名、300点台11名）

14年度最高得点800点（800点台1名、600点台3名、500点台6名、400点台6名、300点台14名）

15年度最高得点925点（900点台1名、700点台1名、600点台5名、500点台5名、400点台13名、300点台22名）

■ 近年高得点を獲得する学生が目立ち、徐々に力を伸ばしているのがわかる。今後の発展を期待できる学生層が着実に増加していることも特筆したい。TOEICは語学教育研究所が主体となって行っていたのだが、今後は他の部署で担当してもらうことになるであろう。試験実施後、受験者のスコアレポートを筆者の研究室まで受け取りに来た学生たちの姿は忘れられない。結果に一喜一憂しながらも、結果を検証し今後の勉強方法のアドバイスを与えると、「次回また頑張ります！」と言って研究室を辞する学生の意欲的な姿に成長を感じた。新芽がすくすくと伸びるよう、今後のさらなる発展を願ってやまない。

■ 資格取得対策以外にも文化講演・セミナー、研究会が開催できたことも、研究所としてはありがたかった。というのも、語学を学習する目的は単に4技能を習得するだけでは十分ではないからだ。「ことば」を使うことは、人間の感情・思いを表出することであり、その内容が問われるからである。「ことば」はコミュニケーションの「道具」であるかもしれないが、その「道具」の質を忘れてはいけないと考えている。さしずめ優れた職人が優れた道具（磨かれた道具）を大事にすることに通じているのではないかと思う。

■ 最後になったが、今号に特別寄稿を図書館長の斗鬼正一先生から玉稿を頂戴した。言語ではなく文化人類学専攻の立場からグローバル人材を語っていただいた。研究所外からも木内英太先生から投稿いただいた。さらに、ニュージーランド研修を第1回からこれまで担当され続けている新井正彦先生は、

25年間の歩みを述べていただいた。そのご苦勞が伝わってくる。広岡勲先生は、グローバルセミナー開催に大きな尽力をしてくださった。また今号で初めての書評を執筆いただいた。ジャーナリストの視点から、福島原発の問題と言葉の表現方法の問題と関係づけ批評している。感謝申し上げます。これまで江戸川大学の教職員の方々からは多くのご支援とご協力をいただいた。心より感謝申し上げます。いつもながら学術情報部の高橋恵美さんには、紀要発行を初め最後までご協力をいただいた。心より感謝申し上げます。

語学教育研究所長 海老澤 邦江